

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子晴海トリトン保育園
施設所在地	東京都中央区晴海1-8-2
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「科学・宇宙・星」

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

3歳児の頃からロケットごっこを楽しんでいた5歳児クラス。その時の活動は一人の男児の興味から始まり、クラスへと広がっていった。今回、4歳児が少ないため5歳児と4歳児との混合保育を行う中で特に宇宙に興味がある5歳児の男児の話が面白いということが発端でロケットごっこを思い出し興味関心が4・5歳児クラスに広がっていった。それは、ニュースで目にした宇宙飛行士の姿から水やリンゴが浮かぶ事や広く美しい宇宙の様子に不思議や感動を覚えた話。そこからクラスで再現してみたいとの発想からこのテーマへと発展した。

2. 活動スケジュール

【クラスの興味を探る】

5月～6月 合同保育になり宇宙に興味がある5歳児男児の話にクラスが引き込まれ、話題は宇宙の大きさや美しさや星座の話が多くなる。このころは図鑑を広げて惑星の大きさなどにも興味が及ぶ

【子どもたちの興味を深める】

7月 園児の興味関心が大きくなってきたので、保育室の大きなスクリーンで宇宙旅行に行ったかのような動画をみたり購入した絵本や図鑑で惑星の大きさや特徴を話し合った。そこから遠足の場所も宇宙に関するものが見たいとなり保育士がそれをもとに計画をしていく。

【遠足で宇宙に出会う】

10月24日 遠足を兼ねて「日本科学未来館」へいく。そこで見た疑似体験のスペースがとても楽しかったようで園でも保育室でまねて遊びが始まった。

【室内に惑星を作る】

11月～12月 おまごとスペースで購入していたビニール素材で保育士が簡単な屋根をつくると、そこが宇宙船になり次々とトイレやシートベルトなどが作られていく。そんな時に5歳児女児が「お部屋全部を宇宙にしようよ!」と提案しクラスで賛成となる。

図鑑や動画や科学館探訪で得た知識を出し合い、惑星作りが始まる。好きな惑星について検索をして大きさや特徴を発表しあう機会も作られた。大きさを比べて「月はこれくらいだったら太陽は何倍?」など知恵を出し合いながら再現していく姿は「知識」「提案力」「協力」「行動力」など今までには見られなかった積極性が培われていった。次第に全ての惑星が大きさや並び順も再現されて保育室が宇宙になった。(カラーポリで暗さもつくり、ポスターカラーを混ぜて図鑑の色を再現しながら惑星もつくられた)

【宇宙ごっこに発展する】

12月 自分の好きな惑星の住人になってやりとりが展開される。そのストーリーを発表会の劇にして保護者に観てもらおう。その後、宇宙船ができ、他クラスの園児や保育士・保護者も招待して宇宙旅行ごっこが展開された。この活動を通して現れた園児の変化について保育士間で共有した。

【宇宙船に招待する】

12月～1月 保育室の宇宙船にたくさんのお客さん(スタッフ、他のクラスの子どもたち、保護者)を呼んで案内や解説を子どもたちが主体的に行う。チケットを配布して招待。宇宙船に案内シートベルトをつけてもらいカウントダウンで発射。暗い中で惑星を動かし宇宙を再現する。其々が役割を責任をもって行う姿が印象的だった。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

室内をカラーポリで宇宙に似せた環境をつくる。

図鑑や絵本を設置して探求ができるスペースを設けた。

惑星をつくる時には園児が自由に色を混ぜられるようにポスターカラーもつかいやすいように配慮した環境を用意した。

園外活動は「日本科学未来館」への遠足を設定した。

【購入品】 図鑑・絵本・カラーポリ・画用紙

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【クラスの興味を探る】

宇宙についての話し合いをクラスで行う。各自の不思議や興味を伝え合う

【子どもたちの興味を深める】

図鑑や動画で遠さや大きさや色などについて調べていく。

【遠足で宇宙に出会う】

未来科学館に行ったことで再現してみたいと気づく。

【室内に惑星を作る】

保育士がおままごとスペースに1枚のカラーポリで屋根を作ったことがきっかけで宇宙船作りがはじまる。図鑑で調べた大きさなどを再現するためにそれぞれがどのような対比の大きさなのかについて話し合ったり作ったりしていく。惑星の温度に興味をもち、ここは暑い星・ここは寒い星など興味も広がる。

【宇宙ごっこに発展する】

宇宙への関心から宇宙旅行の実行へと興味が移行していく。また宇宙人になりきってのストーリーも展開されていく。宇宙人になりきってのストーリーを作り上げて発表会で劇を演じる。

【宇宙船に招待する】

保育室の宇宙船にたくさんのお客さん（スタッフ、他のクラスの子どもたち、保護者）を呼んで案内や解説を子どもたちが主体的に行う。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

子ども会議の中でも子供たちの発言を大切に、共感したり褒めたりしながらたくさん意見が出されやすい環境を作っていた。また、保育士が解っていることもいることも答えを伝えずに子供たち同士で考え合うような場面を作っていた。

惑星作りでは、電卓・図鑑・iPadなどを使いたい時に準備できるように配慮して、どのように調べたらよいか解らないときだけ保育士が関わるようにしていた。重力の違い・温度の違い・大きさの違い・距離の違い等を調べて、解ると博士気分になって周囲の保育士や友達に伝えていた。とても自信に満ちていた。

子供たちは自分のお気に入りの惑星をみつけると夢中になって作成をしていた。その後は宇宙人になりきるための言葉や衣装を考え出すまでになっていた。「ワレワレハ ウチュウジン」という言い方を保護者から聞いてきて言ったり「それは日本語じゃない?」「もっとちがう言葉だとおもうよ」「じゃあ# \$ & * ?」などと楽しい会話もイメージを膨らませて楽しんでいた。これが宇宙人ごっことなり、そのストーリーを発表会での演目にした。

保育室に水金地火木土海冥の惑星が天井からぶら下がり、大きさの比率も考えられたものができた時は達成感でいっぱいだった。そこで子供たちが考えた劇が発表されて皆で感動した。

この発表会で活動は終わらず、こどもたちの発案で宇宙船をつくって「みんなを宇宙に連れていこう!」ということになり宇宙船・チケット・窓に行き交う惑星等を準備していく。スタッフや保護者も巻き込んだ活動へと発展し、子どもたちの発信力にも驚かされた。チケットには「宇宙にご招待します。びっくりしてくれたら嬉しいな」と書かれていた。この言葉から、子どもたちは自分たちの活動に自信を持っていて、【自分たちが感動したことをみんなにも伝えたい】という成長した姿があり保育者全体でこの姿を喜び合うことができた。学びに向かう力の現れとして感動的な宇宙旅行で活動はフィナーレとなった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

①取り組み前は興味のある園児だけのロケットごっこだった（3歳児の頃）。それが、②この取り組みを通して宇宙らしさも加わりスケールの大きな保育活動になり子供たちも達成感でいっぱいだった。はじめは宇宙の知識を科学的に探求する方向になるかと考えていたが、そこに興味があったのは一部の男児で他の園児の意見や発想で思わぬ「宇宙人ごっこ」に発展したことも大きな変化でした。双方の興味を「受け入れる」という力が育っていることが判り保育士も嬉しくなった。③取り組みの中では、それぞれに得意なことが際立ち、それを認めあったり広め合うことで自信につながったと感じる。一人の知識や発想がクラスの中で意見交換や協力をする中で更に豊かになることを保育士も実感した。後半では友達関係も広がり、一人ひとりが自分の想いで動けるようになっていたことには驚きました。（以前は誰かのマネをしたり、許可がないと動けないという園児もいたため）
また、この経験を通して、保育士が難しいと感じるような事でも子供たちは子供たちなりに解釈をして自信をつけて、大人の心配をよそにチャレンジしたり大きな成果をみつけたりしていくのだということに気づくことができました。

④この経験を基に子供たちの興味関心を大人の感覚で制限することなく、常に自由で新しい発想や意見も取り入れて保育環境を整えていけるようにしたいと感じ、保育士内で共有をした。

保育者は発表会で共有できたことで素敵な活動になったと思っていたが、子どもたちがその後つくったものをみてほしい、と大人の予想を超えて、みんなを宇宙船に招待するような行動をみせた。成長した姿に驚くとともに感動的なフィナーレとなった。活動全般で一人ひとりの得意なことや長所を出し合って認め、協力していく姿に逞しさと優しさを感じた。